

アンナ・マニャーニの演技にイタリア人は戦後の自画像を見た

いしだ みのり
石田美紀

新潟大学人文学部准教授



いしだ みのり ● 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。イタリアを中心に、日本とハリウッドを視野に入れた映像文化を研究。共著に『カラヴァッジョ鑑』、共訳に『良き女性の作法について』（アレッサンドロ・ピッコロミニ著）ほか。近刊として『入門・現代ハリウッド映画講義』（共著）がある

ネオレアリズモが生み出した『無防備都市』のシーン

レジスタンスとナチスの攻防を描いたロベルト・ロッセリーニ監督『無防備都市』（45年）には、忘れられないシーンがある。

女が婚約者の名を叫びながら、彼をのせたナチスのトラックを追いかけている。そのとき、マシンの鋭い銃声が響き、彼女は倒れる。



アンナ・マニャーニ演じるビーナが婚約者を乗せたナチスのトラックを追いかけるシーン。ロベルト・ロッセリーニ監督『無防備都市』（1945年）

結婚式を目前にしてナチスに射殺される女の姿は、ベニート・ムッソリーニが率いたファシスト政権（1922〜43年）の断末魔であっただけでなく、イタリアが民主国家として再生するための人身御供でもあった。というのも、第二次世界大戦後に発表された『無防備都市』は、娯楽商品に徹したファシスト政権下の映画に異をとる映画刷新運動、ネオレアリズモが生み出し

た作品だからである。つまり、このシーンからイタリアの戦後は始まったといつてよいだろう。

『無防備都市』において非業の死を遂げるヒロイン、ビーナを演じたのが、アンナ・マニャーニである。マニャーニはいわゆる美人女優ではない。とはいえ、卓越した演技力だけを武器としたわけでもなかった。マニャーニは、映画観客とよばれる無名人たちの喜怒哀楽の表現者であり続け、圧倒的な支持を得た。だからこそ、彼女をイタリアの「国民的女優」に選びたい。たしかに、ソフィア・ローレン、シルヴァーナ・マンガノ、クラウディア・カルデインナレといった才色兼備の女優たちも捨てがたい。しかし、彼女たちは「国民的女優」というよりも「スター女優」と呼ぶべき存在だろう。

「スター女優」ではなく「国民的女優」。この称号にふさわしい、マニャーニの魅力の一端をここで紹介しよう。波瀾万丈の人生に培われた豊かな内面世界

「わたしのなかにはたくさんの人、たくさんの女、そう2000人もの女がいるの。わたしは彼女たちと会うだけでいい」

の経験が最大限に活かされている。体に刻んだ痛みと悲しみから生まれる演技を超えた存在感

着実にコメディエンヌとしてのキャリアを積むマニャーニであるが、その私生活は穏やかではなかった。35年に映画監督ゴツフレード・アレックスサンドリーニと結婚したものの、42年に破局。俳優マッシモ・セラートとの間にもうけた息子ルーカはボリオに苦しむことになった。そして、彼女の苦しみとシンクロするかのようには、イタリアにもさらなる災厄が訪れる。

43年7月25日にムッソリーニが失脚したのち、北部はナチスによって占領され、その結果、イタリアは45年春の解放までナチスと連合軍が死闘を繰り返す戦場と化してしまったのである。

しかし結果的に、戦火はイタリア映画に新たな息吹きを吹き込んだ。過酷な現実を虚飾なく描こうとするネオレアリズモが誕生したのである。マニャーニはロッセリーニと組み、ネオレアリズモの代表作『無防備都市』を世に送り出す。世界はその生々しさに目をみはった。

体に痛みと悲しみを刻みつけたマニャーニの演技を超えた存在感は、イタ

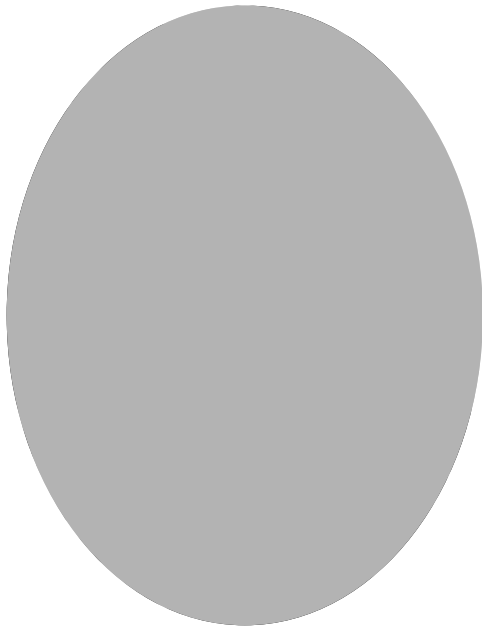
から演じるべき人物を引き出すもの、つまりは彼女の豊かな内面世界の賜物であった。そして、この独自のメソッドは、メロドラマさながらの波乱に満ちた彼女の人生と深く関係している。

1908年、マニャーニはローマに生まれた。父は不明。そして母も幼いアーナをローマに残し、新しいパートナーとともにエジプトに移住した。祖母に育てられたマニャーニは父を懸命に探し、母を求めてエジプトにも赴いた。しかし、親に愛されたい、というささやかな、そして正当な彼女の願いは叶えられないことはなかった。幼年期に別れをつげた彼女はローマに戻り、18歳から演技の勉強にのめりこんでいく。

マニャーニの最初のフィールドは、喜劇王として名を馳せるコメディアン、トトの前座や、レヴェューであった。彼女は舞台で修業を積んだのち、30年代半ばに、本格的に映画へと進出していく。ただし、ファシスト政権期喜劇の代表作であるマリオ・ボンナルド監督『愛の30秒』(36年)でみせた見事なマシンガントークや、ヴィットーリオ・デ・シッカ監督『金曜日のテレザ』(41年)で好演した、どこか抜けている憎めないシヨールガルなどには、舞台

ルキーノ・ヴィスコンティ監督『ベリッシマ』(1951年)のマニャーニ(中央)。幼い子どもをスターに育て上げようと奮闘する母親の姿をコミカルに描く

マニャーニは自身の演技についてこう語った。その言葉のとおり、彼女はコメディイからメロドラマまで幅広いジャンルに出演し、シヨールガルから母親まで、さまざまな女性像を演じた。彼女の演技は与えられた役柄をゼロからつくりあげるのではなく、内部



『われら女性』(1953年)。オムニバス5編の中の1編で、監督はヴィスコンティ。劇場へ向かうマニャーニが愛犬を連れてタクシーに乗ったことから起きる大騒動を描くコメディ

リア映画の新しいあり方を模索する多くの監督からもっとも求められるものとなっていく。不正義と毅然と対決するルイジ・ザンパ監督『女代議士アンジェリーナ』(47年)、失業中の夫に職を与えようと奮闘するマリオ・カメリーニ監督『道端の多くの夢』(48年)……。スクリーンで泣き、怒り、笑うマニャーニの姿は、ゼロからのスタートを切ったイタリアのヴァイタリテイそのものであり、観客を大いに勇気づけたのである。

監督を虜にした強いまなざし、意志的な鼻梁、豊かな口元

マニャーニは美人女優ではない。先にそう述べた。しかし、彼女の映画を

あらためて振り返れば、多くの監督が、彼女の強いまなざし、意志的な鼻梁、豊かな口元に魅せられていることに気づく。ジャン・ルノワール監督『黄金の馬車』(53年)、ピエル・パオロ・パゾリーニ監督『マンマ・ローマ』(62年)、フェデリコ・フェリーニ監督『フェリーニのローマ』(72年)。いずれの作品も、カメラは、精悍な顔が映し出す心の機微を一瞬たりとも逃すまい、と注視している。そして、美の求道者として知られるルキノ・ヴィスコンティも、マニャーニに魅せられたひとりである。

ヴィスコンティはマニャーニを撮りたいがために、そりがあわなかったチ

エーザレ・ザヴァッティと『ベリッシマ』(51年)で組んだといわれているが、ザヴァッティの脚本でマニャーニを撮ったオムニバス映画『われら女性』(53年)では、彼女に最大級のオマージュを捧げている。アリダ・ヴァッリ、イ

ザ・ミランダ、イングリッド・バーグマン、そしてマニャーニら女優たちが素顔をさらけ出すことをコンセプトにしたこの映画で、ヴィスコンティはマニャーニを徹頭徹尾「女優」として描き、スポットライトを浴びて舞台で歌うその姿を、その表情をじっくりとみせた。哀愁に眉を寄せるマニャーニの顔のクローズアップは、ロッセリーニが監督した「バーグマン」篇での主婦バーグマン(ちなみに彼女はマニャーニからロッセリーニを奪い取った)のくだけた姿とは対照的である。

国民的女優アンナ・マニャーニは、観客だけでなく、監督をも虜にしたのである。そして、マニャーニがダニエル・マン監督『バラの刺青』(55年)でイタリア人女優として初めてアカデミー主演女優賞に輝いたとき、イタリア映画界からは惜しみない賛辞が贈られることになった。

2008年はマニャーニの生誕100年にあたる。祖母から黒髪と知的な瞳を引き継いだオリヴィア・マニャーニが映画女優として活躍していることをうれしく思いながら、この場を借りてイタリアの偉大な国民的女優アンナ・マニャーニに敬意を表したい。